

Versinken leise …)にある。「物思いの堂々巡り」に取りつかれた「脳味噌」(Hirn)の主は確かに詩の叙情的言語主体=「私」であった。しかしいま「私たちの額」の顛末を、その「私」はどこから見ているのか。「額」(Stirn)が「脳味噌」(Hirn)の換喩であるとして、「格子を嵌められて」いるというのは、「私」の内的な、したがって私的な体験である。ところが「静かに」では、メランコリーの「やぐるまぎく色」の中へ沈んでいくのが「私たちの脳味噌」のいわば共同体験として、同一の「私」によって見届けられている、そしてその情景が「外部」=「内部」の二重写しとして表象、表現されていることになる。

この詩においても、その継時的展開の全体印象を決定づけるのは⁽⁴⁵⁾、冒頭第一詩行の言表であり、とりわけその色彩限定詞「黒い」(schwarz)である。そして(1)「ひまわりの花」において、冒頭の「金色」(golden)が終わり[未完了相]の「花の色」を予示していたように、(2)「静かに」の冒頭の「黒」は、花の終わり[完了相]の内的色相を暗示している。叙情的「私」の内的-外的視野に捉えられている花たち、「ひまわり」、「アスター」、「もくせいそう」はすべて枯死して本来の「花の色」が失われ、それぞれ「黒」(schwarz; schwärzlich)、「茶色」(braun)という色相環系外の「汚れを暗示する色」^(*)を呈している。すなわちここでは、本来の「花の色」はすでに「不在」であり、その不在の場に死の色が現前しているのである。それに対して、生きた「花の色」として表出されている二つの色彩語:「すみれの花色」(Violenfarben)、「やぐるまぎくの花いろ」(Zyanenfarben)についてはどうかといえば、この詩の言語主体=「私」の外的視野には、「すみれの花」も「やぐるまぎくの花」もすでに最初から存在していない。すなわちこの二つの「花の色」は、「私」の内的視野に喚起された(浮かび出た)「主観的色彩」であり、不在の「花の色」の現前である。

^(*) […]これらにさらに「明」(Hell)と「暗」(Dunkel)の表示を加えれば、同時にまた幾分か「汚れ」(Besmutzungen)の表示を示唆すれば—それに対しては同様に単音節の語:「黒」(schwarz)、「白」(weiß)、「灰色」(Grau)、「茶色」(Braun)を使用できる—、生起してくる諸現象をかなり十分に表現できるであろう[…]. (『色彩論』:「命名法」§611)

第一稿(「静かに」)の枯れた花たちは、第二稿(「メランコリア」)、第三稿(「メランコリー」)では、その形姿も、名も、すべて消え去り、僅かに「薄青い影」たちが、その「暗い眼」で背後から「私」をみつめている。この眼のさらに背後(奥)が、あの「押し黙る暗闇」(「ひまわりの花」)の領域であろう。

Bläuliche Schatten. O ihr dunklen Augen,
Die lang mich anschaun im Vorübergleiten.

(Melancholie 3. Fassung V. 1-2:HKAI, S. 35)

薄青いかげたち。おお きみたち 暗い眼 よ
傍らを通り過ぎていくほくを ずっと見ている。(「メランコリー」第三稿)

(3) 『ヘルブルンにて』

この詩は1914年春(3月6日-5月15日)、インスブルックで書かれ、1914年5月15日発行の「ブレンナー」(第16号)に、もう一つの詩「年」(Jahr)と同時に掲載された。この両作品は折から出版計画が進行中であった詩集「夢のなかのゼバスティアン」*Sebastian im Traum*に収載されることになっていたが、トラークル自身の要望により、最終的にそこから除外された。歴史批評版「トラークル全集」(HKA)には、「1914/15年「ブレンナー」誌上発表の詩」一四篇中の一編としてその冒頭に収載されている。

In Hellbrunn

ヘルブルンにて

Wieder folgend der blauen Klage des Abends
Am Hügel hin, am Frühlingsweiher -
Als schwebten darüber die Schatten
lange Verstorbener,
Die Schatten der Kirchenfürsten, edler Frauen -
Schon blühen ihre Blumen, die ernstesten Veilchen
Im Abendgrund, rauscht des blauen Quells
Kristallne Woge. So geistlich ergrünen
Die Eichen über den vergessenen Pfaden der Toten,
Die goldene Wolke über dem Weiher.

再びまた 夕暮の青い嘆きの後を追って
丘の辺を過ぎ 春の池のほとりに -
池の水面を とうに死んだ人たちの
影が 漂い動くかのよう、
大司教たち、貴婦人たちの影が -
もう咲いている その死者たちの花、厳粛な堇の花が
夕暮の底の地に、ざわめいている 青い泉の
水晶の大波。あのように森厳と 緑深めている
榿の木々が 死者たちの 忘れられた小径の上に、
金色の雲が 池の上に。

(HKA I, S. 153)

この詩の継時的全体は以下のように分節できる：

- [i] (いつかのように) また、夕暮の「青い」(blau) 嘆きの後を追って丘の辺を過ぎ春の池のほとりに来ている。(第1-2節)
- [ii] 池の水面には遠い昔に死んだ高位の聖職者たち、貴婦人たちの「影」(Schatten) が浮かび漂っていくかのようだ。(第3-4節)
- [iii] 死者たちの花、厳粛な「堇の花」(Veilchen) が、「夕暮れの底」(Abendgrund) に、もう咲いている、「青い」(blau) 泉の水晶の大波がざわめいている。(第5-7節)
- [iv] 森厳として「緑を深めている」(ergrünen) 榿の木々が、(かつて) 死者たちの(通った、いまは) 忘れられた径の上に枝を掲げている、池の上空には「金色」(golden) の雲がかかっている。(第7-9節)

すでに序章において触れたように、トラークルの作品にはゲーテの色相環で重要な役割を担う色彩語「堇色」(Violett)の使用例はない。その「堇色」が、(a)「ヘルブルンにて」のように、堇の花の「名」:Veilchen によって「色」が代表(暗示)されているものが七例、また(b)「静かに」(「メランコリ」第1編)のように、明示的に「堇の花の色」(Violenfarben)と表現されているものが五例である。その二例を再度示せば：

[1] Im Stoppelfeld ein schwarzer Wind gewittert. 切り株畑には 一陣の黒い風の気配がして。
 Aufblühn der Traurigkeit Violentfarben, 花開く 悲しみの堇色、
 Gedankenkreis, der trüb das Hirn umwittert. どんよりと脳味噌を取り巻く物思いの堂々巡り。
 (Leise 1-3V.) (「静かに」)

[2] Im Krug an scheußlichen Tapeten 嫌味な壁紙ざわの 花壺に
 Blühn kühlere Violentfarben. 咲いている ひときわ寒々とした堇色。
 (Kleines Konzert 17-18V.: HKA1, S. 42) (「小音楽会」)

[1]と[2]は同じ「堇色」(Violentfarben)で表されてはいるが、[1]:「静かに」の場合は、「私」の視覚的想像力によって喚起された主観的色彩としての不在の「花の色」であり、一方[2]:「小音楽会」の「堇色」は、実在の囑目された「堇の花の色」である。

これに対して、「ヘルブルンにて」の「堇の花」は、「死者たちの花」(ihre Blumen)と呼ばれ、「厳粛な堇の花」(die ernstesten Veilchen)として表象されている(第5詩行)。

Schon blühen ihre Blumen, die ernstesten Veilchen 　　もう咲いている あゝ死者たちの花、厳粛な堇の花が
 Im Abendgrund, rauscht des blauen Quells 　　夕暮の底に、ざわめいている 青い泉の
 Kristallne Woge. [...] (In Hellbrunn 5-7V.) 　　水晶の大波。[...] (「ヘルブルンにて」)

ここでは「花の色」(堇色)は暗示的である。また、この暗示的な堇色は—とくに「堇の花」に付された所有代名詞「かれら(死者たち)の」(ihr)、限定詞「厳粛な」(ernst) からして—外部現実の囑目の堇の花のそれではなく、むしろ叙情的言語主体=「私」の内的視野に喚起された非(現)実の花の色であろう。そしてこの暗示的「厳粛な堇色」は、厳密にみれば、上に引用した[1][2]の明示的な「堇色」とは、この詩の言語主体=「私」の内的色相環において占める位置(領域)を異にしている。

ここで一旦、「堇色」から「ヘルブルンにて」に使用されている色彩語とその配置へと眼を転じれば、全九詩行で構成されたこの詩の冒頭と末尾に、それぞれ明示的な「青色」と「金色」が布置され、この両者のまさに中央に、「すみれの花」の暗示的「堇色」が、さらにまた、その後「青色」(第7詩行: 青い泉)と「緑色」(第9詩行: 緑と緑深める壺)とが、一見さりげなく配されている。しかしこれら四色の配置、配合が表現意図的になされていること、同時に、これら四色が単に直覚的印象に従って選ばれたのではないのはおのずから明らかである。

「ヘルブルンにて」のこのように整然とした色彩選択、配置の根底に、ゲーテの「色彩論」の摂取、同化と、その独自の色相環への転用が見えてくる。そしてこの(潜在的)色相環の存在と機能は、その形成過程を通時的に跡付けることによって、より明確にされる。

トラークルの色彩表現の多彩さは既に、初期作品の一つ、ヘルブルンを主題にした最初の作品[a]:「ヘルブルンの三つの池(第一篇)」*Die drei Teiche von Hellbrunn*(1909)の印象主義的表現においてすでに認められる。そしてこれを象徴主義的に改稿した[b]:「ヘルブルン

における三つの池(第1稿) (-1912)を経て表現主義的作品[c]:『庭園で』 *Im Park* (1912)に至って、独自の色彩表現が達成される。

[a]Um die Blumen taumelt das Fliegengeschmeiß 花たちのまわりを 蠅の奴めが ふらふら翔んでいる
 Um die bleichen Blumen auf dumpfer Flut, どんよりと鈍色の 満々の水の上の 蒼褪めた花たちのまわりを、
 (Die drei Teiche 1. Fassung 1-2v. HKAI, S. 177) (『ヘルブルンの三つの池』)

[b]Hinwandelnd an den schwarzen Mauern 夕暮の黒い壁に沿ってそそろに行けば、
 Des Abends, silbern tönt die Leier オルフォイスの豎琴の音が 暗い池で
 Des Orpheus fort im dunklen Weiher 銀色に鳴り続けている
 (Die drei Teiche 2. Fassung 1-2v. :HKAI, S. 178) (『ヘルブルンにおける三つの池』)

[c]Wieder wandelnd im alten Park, また再び古い庭園をそそろに歩けば
 O! Stille gelb und roter Blumen. おお!黄と赤の花ばなの 静けさ。
 (Im Park 1-2v. :HKAI, S. 101) (『庭園にて』)

[a] (『第1稿』)は初期の印象主義的段階にある情調詩(Stimmungsgedicht)である。⁽⁴⁵⁾『ヘルブルン』の名に背く「どんよりとした」(dumpf)池の水面の、「蒼褪めた」(bleich)花(睡蓮?)の色は、明らかに詩的言語主体=「私」の外的視覚の対象でありながら、内部の気分、情調の影を映し出している。

[b] (『第2稿』)の冒頭は、叙情的言語主体=「私」が夕暮の「黒い」(schwarz)壁に沿って「池」の方へと歩いて行く場面。「第一稿」の「蒼褪めた花」が「オルフォイスの豎琴の音」に換えられ、池の水面の色は「鈍色の」(dumpf)から「暗い」(dunkel)に改められている。

[c] (『庭園にて』)は、トラークルの成熟期の作品を集めた詩集『夢の中のゼバスティアン』 *Sebastian im Traum* (1915)の中の一編である。ここにはすでに表現主義的な手法が認められる。とりわけそれが鮮明なのが、引用第二行目の色彩語の使用、「黄と赤の花ばなの静けさ」である。「黄色」(gelb)、「赤色」(rot)という色彩指示語によって、この花々を囑目の対象として明示しながら、それを「(花ばなの)静けさ」(Stille)として、いわば聴覚的对象として異化している。また、「黄」と「赤」を並置し、さらに黄(gelb)の語尾の省略(?)によって両者を近接させ、それぞれの色感を極度に高進させている。

「色彩は活字の上では修飾語(Beiwort)に身を落としているが、実際には、詩の言表の心象(Vorstellung)を担っている。これに対して、抽象概念(Abstrakta)が担うのはその意味のみである」⁽⁴⁶⁾というトラークルの色彩表現一般に対する指摘はこの「黄」と「赤」とに関して、まさに肯綮に当たっている。その強烈な色感、詩集『夢の中のゼバスティアン』の枠も二年という時間の隔たりも無いかのように『ヘルブルンにて』の色彩語の選択、配合にまでも強い影響を及ぼしている。

以上、[a][b][c]において使用された明示的な色彩名(ゲーテ:『色彩論』、第49章「色彩の命名法」に記載されているものに限る)は、[b]:「黒」(schwarz)「暗」(dunkel)、[c]:「黄」(gelb)「赤」(rot)である。一方、通時的にみてこれら[a]-[b]-[c]-系列の最後に位置するこの詩「ヘルブルンにて」において、これらの色彩名は使用されていない。ここからきわめて特徴的な徴候が読み取られる—これらの色彩名は表現意識的に排除されている、と。すなわち、「ヘルブルンにて」の言表主体=「私」は、すでに内部化された庭園の夕景を「青」、「堇」、「緑」、「金」四色の適切な配置、配合によって最も効果的に描き出すために、「黒」と「暗」そして「黄」と「赤」の使用を自らに禁じたのである。

以下、「ヘルブルンにて」に使用されている「青-堇-緑-金」四色それぞれの、感覚的、心的作用について、順次に見ていく。

- [1]「青」について:この詩では「青はつねになにか暗いものを伴っている」⁽⁴⁷⁾「青」はわれわれに寒さ(Kälte)を感じさせる、また陰影(Schatten)を想起させる⁽⁴⁸⁾といわれる「青」を「純粋な状態」⁽⁴⁹⁾に保つために、「黒」と「暗」が予め意図的に排除されている。
- [2]「堇」について:この詩の、青い「夕闇の底に」幻視された「堇」の花の色は、いまは影となって水面に遙曳する高位聖職者たちの外衣の色、さらに高位の枢機卿の「緋衣」(Kardinalpurpur)をめざして不断に高進に努める不安の色⁽⁵⁰⁾すなわち不在の「深紅」を自らに内在させている「青赤色」(Blaurot)である。
- [3]「緑」について:この詩の、不安を潜ませた「厳粛な堇色」に対置されている「森厳な緑」は、その「堇色」の不安を鎮め「私」の視覚的想像力に「現実的満足感」⁽⁵¹⁾をもたらす作用を期待されている。
- [4]「金」について:「金」は、元来色相環に色彩として認知、登録されていない(ゲーテにおいても同様である)が、トラークルの作品では使用頻度の最も高い色彩語の一つである。先に考察した「ひまわりの花」が(「黄」ではなく)「金色」であることからしても、トラークルの潜在的色相環では、「金」は(ゲーテの色相環の「赤」に対する「深紅」のように)「黄」の上位を占めている。「黒-灰-茶」系の「汚れ」に対してとりわけ敏感な「黄」は⁽⁵²⁾、これに対する抵抗性の高い(上位の)「金」に置き換えられている。

(4) むすび: 最後の花の色—堇

ゲーテの『色彩論』(第六部「色彩の感覚的論理的作用」)のなかに、上述の「色彩の組合せ、配置・配合」に関わる重要な記述が見出される。つぎの(一)(二)にその要点を示す。

(一)色彩は、眼の感覚に作用する。そして眼の感覚の仲介により心情(Gemüt)に作用する。色彩はそれぞれ特殊な作用を持つ。そして他の色彩との組合せによって、ある場合は調和した作用、またある場合は特異な作用、そしてしばしば不調和な作用を喚起する。しかしこれらいずれの場合にも、色彩の心情への作用は常に顕著であり重大である。⁽⁵³⁾また、個々それぞれの色彩印象が混同されることはありえない。それぞれの印象は、それぞれに特殊な作用を及ぼし、かならず生体器官の中に明らかに特殊な状態を惹起する。心情に対しても同様

である。⁽⁵⁴⁾

(二)眼は当の色彩を認めると同時に活動状態に置かれ、自らの本性に従って即座に、無意識かつ必然的に別の色彩を喚起する。喚起された当の色彩と最初に認めた色彩とをもって全色相環の総体が包含されている。⁽⁵⁵⁾ 眼はこの色相環の全体を認めるため、自ら(の本性である全体への欲求)を満たすために、有色の空間と並んで同時に無色の空間を必要としている。⁽⁵⁶⁾

ゲーテはまた、色彩の組合せに関して、色相環のプラス側の色彩:「黄-橙-深紅」の組合せによって「強大な効果」が惹起され、マイナス側の「青-堇-深紅」の組合せからは「温和な効果」が生じる、と述べている。⁽⁵⁷⁾ これに従えば、例えば上に触れた表現主義的な「庭園にて」の「黄-赤」の組合せは、明らかに前者を意図しているのに対して、この詩「ヘルブルンにて」の「青-堇」は後者を指向している。

つぎに(二)の「眼の本性的な欲求」との関連から、「ヘルブルンにて」の「堇」と「金」との組合せについては、最終行の「金色の雲」が最終段階で追加されたこと、したがってこの詩の言語主体=「私」の眼が最初に認めたのは「堇」であることが、異稿(Ⅱ)から知られる。⁽⁵⁸⁾ そしてこの「堇」によって必然的に「金」が喚起され、この二色をもってこの詩の(潜在的)色相環の全体が包含されることになる。またゲーテが述べているように、「有色空間」の存立には、同時に(neben)「無色空間」の存立が必須の前提であるなら、色相環全体に対応する無色相の空間が同時に存立していなければならない。そして「闇-光」⁽⁵⁹⁾、「暗-明」⁽⁶⁰⁾で表記されているのがその無色相の空間であり、それを代表する色名が「黒-灰-白」⁽⁶¹⁾である。そして色彩はすべて、「白」よりも「暗く」(dunkel)「黒」よりも「明るく」(hell)見えるという点では「灰」と一致している。⁽⁶²⁾ 以下に本章で取り上げてきた「ひまわりの花」、「静かに」、「ヘルブルンにて」それぞれの「無色空間」について確認しておきたい。

(1)「ひまわりの花」では、「光」にもっとも近い花の色=「黄」(ここでは「金」に代表されている)が「闇」の無色空間に現出している。

Inmitten jener goldenen/Blumen der Schwermut/
Bestimmt den Geist/die schweigende Finsternis.

(あの 金色の 憂鬱の/花たちの真ん中で/精神を決めるのは/押し黙る 暗闇。)

(2)「静かに」の、枯死した花の色で形成されている有色空間は、「どんより」、「黒い」「メランコリー」の無色空間に侵されている。

Im Stoppelfeld ein schwarzer Wind gewittert./Aufblühn der Traurigkeit
Violenfarben,/Gedankenkreis, der trüb das Hirn umwittert.

(切り株畑には 一陣の黒い風 の気配がして。/悲しみの 堇色が 花開く、/どんよりと 脳味噌を取り巻く、堂々巡りの物思いが。)

(3)「ヘルブルンにて」における夕暮れの「青」を基調とした有色空間は、「白」の「無色空間」と共存している。[異稿(Ⅰ)には「白い夕暮」(der weiße Abend)とある。]⁽⁶³⁾

Wieder folgend der blauen Klage des Abends/Am Hügel hin, am Frühlingsweiher
(再びまた 夕暮の青い嘆きを辿って/丘の辺を過ぎ、春の池のほとりに -)

また「青」は、それ自身「つねになにか暗いもの(etwas Dunkles)を帯びた」、⁽⁶⁴⁾「陰影」(Schatten)を想起させる⁽⁶⁵⁾、いわば「黒」に親和性をもつ色である。この「青」を、同時にまた「堇」を、迫る夜の「黒」から隔て、夕空の雲に「白」の残照「金」を引き留めるためにもう一度澄明な泉の「青」が喚起される。⁽⁶⁶⁾

Schon blühen ihre Blumen, die ernstesten Veilchen/Im Abendgrund rauscht des blauen Quells/Kristallne Woge. [...] /Die goldene Wolke über dem Weiher.

(もう咲いている その死者たちの花、厳粛な堇の花が/夕暮の底に、ざわめいている 青い泉の/水晶の大波。[...] /金色の雲が 池の上に。)

この詩の色彩配置の中心的機能を担うのが「堇の花」であり、この花には不在の色「青赤色」(Blaurot)が託されている。そのことは「彼らの花」(ihre Blumen)といわれていることから知られる。

Als schwebten darüber die Schatten lange Verstorbener, /Die Schatten der Kirchenfürsten, edler Frauen -

(池の水面を とうに死んだひとたちの影が 漂い動くかのように/大司教たち、貴婦人たちの影が -)

水面に幻視された「影」は夕暮の「青」でも、夜の「黒」でもない。大司教の纏う大外衣の色「青赤色」であった。そしてこの(不在の)「青赤色」が「夕暮の底」に「堇の花」を現出させたのである。この「堇」には、「青赤色」と同時に不在の「深紅」が託されていることは既に述べた。

トラークルの詩的手法の根幹は、心的-精神的な事態の経過、内的経験の描写 (Abbildern) と[言語的]具象化 (Konkretisation) であり、これを具体的な詩の表現の中に識別することが、難解な彼の詩の理解のための、すなわち、その内域へと踏み込むための前提条件であると、クレメンス・ヘーゼルハウスは言う。そしてまた、そこへ至るのに二つの経路があり、その一つは「構成」(Aufbau) と「接合」(Fügung) の究明であり、一つは「隠喩語法」(Metaphernsprache) の究明である。⁽⁶⁷⁾

「構成」と「接合」に関していえば、「ヘルブルンにて」がとりわけ難解とは言えない。この詩の叙情的言語主体=「私」について行けば、読者は容易に庭園の池の畔に立ち、この「私」と同じ眺望を持つことができる。しかしながら、そこに描き出される庭園の情景を読み手=「私」の実的な内的体験として共有するためには、やはりもう一方の経路とされる隠喩語法の究明は不可欠であり、上にとくに入念に追求してきたのもこの詩の中の「厳粛な堇(の花)」という一つの隠喩的色彩表現に託された重要な詩的機能であった。

ここで論を閉じるに当たって、(3)「ヘルブルンにて」においてその「堇」が花の「名」に内示された色彩であることを再確認しておかなければならない。すなわち「1914年/1915年『ブレンナー』誌掲載の詩」全一四篇の冒頭の作品「ヘルブルンにて」の中心に咲いている「堇」(Veilchen)は、これら全一四篇の中で唯一の「花の名」であり、同時にこの作品が[(1)「ひまわり花」(遺稿)の「銚」を除いて]トラークルにとって「私的な」叙情空間の現前の最終の「場」であることを証言する最後の「花の色」である。

テキストおよび参考文献

(I) テキスト

松尾芭蕉：『芭蕉句集』（今榮蔵校注、『新潮日本古典集成』）1982。

：『芭蕉おくのほそ道』（萩原恭男校注）岩波文庫 2004。

：『芭蕉書簡集』（萩原恭男校注）岩波文庫 2005。

與謝蕪村：『與謝蕪村集』（清水孝之校注、『新潮日本古典集成』）1979。

：『蕪村全集』全九巻 講談社 2009。

Trakl, Georg: *Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*, Salzburg 1969.

Bd. I, Bd. II [= HKA I/II]

Rilke, Rainer Maria: *Sämtliche Werke*, 6Bde. Insel. [=SW.]

Rilke, Rainer Maria: *Werke*, Kommentierte Ausgabe in vier Bänden. Insel.

Goethe, Johann Wolfgang von: *Naturwissenschaftliche Schriften I: In: Werke*,
Hamburger Ausgabe Bd. 13. München 1982.

(II) 参考文献

大野 晋：『古典基礎語辞典』 角川学芸出版 2012。

尾形 仝・他（編）：『俳文学大辞典』 角川学芸出版 2008年。

時枝 誠記：『国語学原論』 岩波書店 1968。

：『国語学原論・続編』 岩波書店 1970。

三浦ツトム：『日本語はどういう言語か』 講談社学術文庫 1976。

吉川幸次郎：『読書の学』 筑摩書房 2007。

小西 甚一：『日本文学史』 講談社学術文庫 2011。

：『日本文芸の詩学—分析批評の試みとして』 みすず書房 1998。

：『俳句の世界—発生から現代まで』 講談社学術文庫 2013。

大岡 信：『詩の日本語』 中央公論社 1980。

：『たちばなの夢—私の古典詩選』 新潮社 1972。

山本 健吉：『詩の自覚の歴史—遠き世の詩人たち』 筑摩書房 1979。

：『芭蕉—その鑑賞と批評』 飯塚書店 2006。

：『奥の細道—現代語訳の鑑賞』 飯塚書店 2010。

：『芭蕉全発句』 講談社学術文庫 2012。

：『定本現代俳句』 角川学芸出版 1998。

尾形 仝：『野ざらし紀行評釈』 角川書店 1998。

久富 哲雄：『おくのほそ道—全訳注』 講談社学術文庫 2005。

雲英末雄・佐藤勝明（訳注）：『芭蕉全句集』 角川学芸出版 2013。

安藤 次男：『与謝蕪村』 筑摩書房 1970。

復本一郎（監修）：『俳句ノ花図鑑』 成美堂出版 2007。

J. W. v. ゲーテ(木村直司訳)：『色彩論』 筑摩書房 2008。

Wetzel, Heinz: *Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls*. Salzburg 1971.

E. ハーニシュ、U. フライシャー(植和田光晴訳)：『広く知られし時代の蔭に—ゲオルク・トラークルの時代のザルツブルク』 三修社 1995。

K. ハンブルガー(植和田光晴訳)：『文学の論理』 松籟社 1986。； 同：『リルケの詩の現象学的構造』 せせらぎ出版 2014。

(注)

序章 (1) Goethe, Johann Wolfgang von: *Zur Farbenlehre*, in: *Werke* Bd. 13. S. 460.

(2) 吉川幸次郎：『読書の学』、369頁。

(3) Goethe, a. a. O., S. 316.

(4) Goethe, a. a. O., S. 328. (5) A. a. O.

(6) Goethe, a. a. O., S. 460. (7) A. a. O. (8) A. a. O. (9) A. a. O. (10) A. a. O.

(11) A. a. O.

(12) 「シンボジウム『トラークルの詩における blau』の総括」(『トラークル研究』第二号 2005、15頁)では、トラークルの色彩語の特徴を「浮き影りに」するために「他の詩人の使用法と比較する」ことを「今後の課題」として提起している。

(13) Wittgenstein, Ludwig: *Philosophische Untersuchungen*, in: *Werkausgabe* Bd. 1. Suhrkamp 1995. S. 384

(14) Wittgenstein, a. a. O., S. 381.

(15) Wittgenstein, *Bemerkungen über die Farben*, in: *Werkausgabe* Bd. 8. S. 16.

(16) 大岡 信：『詩の日本語』、40頁。

(17) Goethe, a. a. O., S. 329.

(18) 木田 元・他(編)：『現象学事典』、弘文堂、35頁。

(19) Goethe, a. a. O., S. 520f. (§915–920).

第一章 (1) 小西 甚一：『俳句の世界—発生から現代まで』、105頁。

(2) 山本 健吉：『芭蕉—その鑑賞と批評』、46頁。

(3) 復本一郎(監修)：『俳句の花図鑑』、115頁。

(4) 小西 甚一：前掲書、121頁。

(5) 山本 健吉：前掲書、91–93頁。

(6) 時枝 誠記：『国語学原論・続編』、91頁。

(7) 尾形 仍：『野ざらし紀行評釈』、242頁。

(8) 国語大辞典『言泉』小学館、巻頭「色名ガイド」参照。

(9) 正岡 子規：『俳諧大要』 岩波文庫 2009年、102–3頁。

(10) 正岡 子規：同上、123頁。

(11) 正岡 子規：同上。

(12) 立松 和平：『芭蕉・「奥の細道」内なる旅』、俊成出版社 1997、26頁： 白河の段に、菖の花が「紅く咲き加わり」とあるのは誤解であろう。

(13) 安藤 次男：『与謝蕪村』、141頁。

- (14) 『與謝蕪村集』(新潮日本古典集成)、38頁、頭注参照。
- (15) 山本 健吉:『古典名句鑑賞歳時記』 角川学芸出版 2009、52頁。
- (16) 山本 健吉:『芭蕉—その鑑賞と批評』、91頁。
- (17) 山本 健吉:同上、92頁。
- (18) 正岡 子規:『俳諧大要』 6-7頁。
- (19) 正岡 子規:同上、106頁。
- (20) 正岡 子規:同上、106-8頁。
- (21) 尾形 仝 :『野ざらし紀行評釈』、249-250頁。
- (22) 『與謝蕪村集』、74頁、頭注参照。
- (23) 安藤 次男:『与謝蕪村』、162-8頁。
- (24) 尾形 仝 :前掲書、250頁。
- (25) 山本 健吉:前掲書、93頁。

第二章 (26) Hamburger, Käte: *Die phänomenologische Struktur der Dichtung Rilkes*. In: *Rilke in neuer Sicht*. Kohlhammer 1971. S. 98f. (植和田・訳:『リルケの詩の現象学的構造』、せせらぎ出版 2014、36-8頁参照。)

- (27) Rilke, R. M. : *Werke*. Kommentierte Ausgabe in vier Bänden. Insel. Bd. 1, S. 911f.
- (28) Goethe, a. a. O. , S. 463.
- (29) 安藤 次男:前掲書、169頁。
- (30) 尾形 仝 :前掲書、242頁以下。
- (31) Rilke, a. a. O. , S. 911f.
- (32) Rilke, R. M. : *Gesammelte Briefe* in sechs Bänden. Insel, Bd. II. S. 279f.
- (33) Rilke, *Werke*, a. a. O. , S. 912.
- (34) Rilke, R. M. : *Sämtliche Werke*. Bd. VI. S. 724.

第三章 (35) Philipp, Eckhard: *Zur Funktion des Wortes in den Gedichten Georg Trakls. Linguistische Aspekt ihrer Interpretation*. Tübingen 1971 S. 33ff.

- (36) Goethe, a. a. O. , S. 323.
- (37) Philipp, a. a. O. , S. 37f.
- (38) 『現象学事典』による。「序章」:注(18)参照。
- (39) Goethe, a. a. O. , S. 328.
- (40) Heidegger, Martin: *Der Ursprung des Kunstwerkes*. In: *Holzwege*. Frankfurt am Main. 1994. S. 61.
- (41) HKAI, S. 445f.
- (42) このヘーリアンについては、『トラークル研究』第五号(2008) 収載の拙論:『カスバル・ハウザー=リートの考察—あるいは表題の詩学—』(28-30頁)参照。
- (43) Goethe, a. a. O. , S. 330.
- (44) 時枝 誠記:『国語学原論・続編』、91頁。

- (45) Goethe, a. a. O., S. 460.
- (46) Basil, Otto: *Georg Trakl in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Rowohlt, 1965. S. 60f.
- (47) Goethe, a. a. O., S. 494. (§758) (48) Goethe, a. a. O. (§761-2)
- (49) Goethe, a. a. O., S. 501. (§805) (50) A. a. O. (§806)
- (51) A. a. O., S. 498. (§778) (52) A. a. O. (§782)
- (53) A. a. O. (§779) (54) A. a. O., S. 499. (§791)
- (55) A. a. O., S. 501. (§802) (56) A. a. O., S. 496. (§770)
- (57) A. a. O., S. 514. (§883)
- (58) HKA II, S. 284.
- (59) Goethe, a. a. O., S. 332. (60) A. a. O., S. 460. (61) A. a. O., S. 386. (§259)
- (62) A. a. O.
- (63) HKAI, S. 283.
- (64) Goethe, a. a. O., S. 498. (§778) (65) A. a. O. (§782)
- (66) A. a. O., S. 495. (§765)
- (67) Heselhaus, Clemens: *Georg Trakl. Gesang des Abgeschiedenen. An Karl Borromäus Heinrich*. In: *Die Deutsche Lyrik. Form und Geschichte*. Düsseldorf 1970. S. 403.

2014年度活動報告

1. 5月24日（土）2014年度春季総会・研究発表会が流山市生涯学習センターにおいて開催された。

総会

- (1) 『トラークル研究』第十一号の発行は、10月1日を目途に発行する。
- (2) 2014年度秋季総会及び研究発表会：10月11日（土）京都を予定
- (3) トラークル没後100年及び本会の創設20周年記念事業
 - 1) 特集号の発行
 - 2) 記念パーティーの開催：2014年度秋の例会時、京都を予定
 - 3) トラークル記念館、ザルツブルク市の行事への参画
 - 4) 特集号の日本独文学会での配布
- (4) 2014年度春季総会・研究発表会
 - 期日：5月30日（土） 会場：日本独文学会会場（武蔵大学）に近い公共施設を予定
- (5) 本会の2013年度決算が承認された。

2013年度決算報告

トラークル協会 2013年度決算報告			
自 2013年4月1日 至 2014年3月31日			
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	9 1 5 3 3	会場費（流山生涯学習センター）	9 0 0
本年度会費	3 4 0 0 0	切手代	5 0 4 0
		「トラークル研究」第九号印刷代（振込手数料を含む）	1 7 4 9 2
		本年度支出合計	2 3 4 3 2
		次年度へ繰越 (内、本年度剰余金	1 0 5 6 8)
合 計	1 2 5 5 3 3	合 計	1 2 5 5 3 3

研究発表会

高橋喜郎 : トラークルの詩における weiß について

三枝紘一 : トラークルの Poetik 序説 - その稿体から見たメチエ

2. 9月3日(水) 2014年度第1回幹事会が開催された。

3. 10月11日(土) 2014年度秋季トラークル協会総会・研究会が京都メルサにおいて開催された。

総会

1) 『トラークル研究』第十一号の発行の予定について

2) 2015年度春季例会: 5月30日(土)、日本独文学会の会場(武蔵大学)に近い公共施設を予定

3) 本会のホームページの開設

研究発表会

伊藤卓立: トラークルの詩「途上にて」 Unterwegs の Laß, wenn . . . について

保坂直之: テキスト検索で読む『夢の中のセバスティアン』の連作形式

(例会後記念パーティーが京都「厚凜」において開催された)

4. 3月3日(火) 2014年度第2回幹事会が開催された。

お知らせ

1. 2016年度春季研究発表会に発表希望の方は、2月末日までに論題をお知らせください。
2. 「トラークル研究」第13号に論文等を発表希望の方は、2月末日までにお知らせください。
3. 会費未納の方は、御納入のほどよろしく申し上げます。

編集後記

「トラークル研究」第十二号をお送りします。

発行が大幅に遅れて申し訳ございませんでした。こころよりお詫び申し上げます。文章が多く編集に時間がかかったのと前号にかなり誤植があったために校正に万全を期したこと、それに加えて編集子のパソコン処理の拙さのためです。しかし発行の運びになったのは、後者の件に関して伊藤卓立氏の懇切なアドバイスを御協力の賜物でした。ここに氏に感謝申し上げます。 (さ)

トラークル協会会員名簿

2015年10月現在

氏 名	住 所	Tel・メールアドレス
石橋 道大	069-0825 江別市野幌東町 61-5 会計監査	011-384-5991
伊藤 卓立	069-0825 茅ヶ崎市柳島海岸 7-23 幹事、編集委員（査読委員）	0467-58-3608
植和田 光晴	633-0067 桜井市大福中津道 1-380-44 会計監査	0744-45-2740
梅崎 潜	940-0853 長岡市中沢 3-562-1-A202	
尾内 達也	363-0022 桶川市若宮 1-8-30-201	
鍛冶 哲郎	215-0013 川崎市麻生区王禅寺東 1-33-3	044-066-2317
岸田 孝一	170-0013 豊島区池袋 3-23-23-602	
児玉 昭人	729-0413 三原市本郷町南方 6660	0848-86-3326
三枝 紘一	270-0122 流山市大畔 237-3 代表幹事、編集委員（査読委員）	04-7150-5782
杉田 芳樹	215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-13-51 ソレイユ麻生 403	044-819-7707
高橋 修	041-0853 函館市中道 2-5-19	0138-31-6807
高橋 喜郎	134-0013 江戸川区江戸川 6-25-1 江戸川ハイツ 801 幹事、編集委員（査読委員）、会計	03-5658-1989
筑和 正格	062-0033 札幌市豊平区西岡 3-8-4-26	011-853-7701
中村 朝子	330-0803 さいたま市大宮区高鼻町 3-61	048-641-6130
保坂 直之	899-4343 霧島市国分野口西 18-11 編集委員（査読委員）	0995-47-0302
三木 正之	654-0112 神戸市須磨区若草町 2-9-8	078-743-2476
南谷 和伸	594-0041 和泉市いぶき野 3-14-4-201	0725-56-6576
宮原 朗	338-0811 さいたま市桜区白鍬 656-2	048-854-4020
両角 正司	116-0012 荒川区尾久 2-43-6	03-5689-5772

トラークル協会会則

1995年 9月 20日制定

2003年 10月 18日改正

2004年 10月 1日改正

2005年 5月 3日改正

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的）本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業）本会は年2回総会・研究発表会を開催する。また年一回研究誌を発行する。その他本会にかなう事業をする。

第四条（会員）本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。

第五条（役員）本会は会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入によって支弁し、会費は年額2000円とする。

第八条（決算）本会は毎年度決算をし、総会に報告する。

第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務所在地を当分のあいだ、三枝紘一気付とする。